

青森市埋蔵文化財調査報告書 第27集

桜峯(1)遺跡発掘調査概報

— 国道103号横内バイパス道路改良工事事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 —



平成7年度

青森市教育委員会

序

青森市教育委員会では、国道103号横内バイパス道路改良工事に係る埋蔵文化財の発掘調査として平成6年度から市内横内、雲谷地区に所在する桜峯(1)・(2)遺跡の発掘調査を実施しております。

昨年度報告書を刊行いたしました桜峯(2)遺跡に引き続きまして今年度は、桜峯(1)遺跡の調査を実施いたしました。

今回の調査によって、竪穴式住居跡や土坑群等、縄文時代の集落跡の一部が検出され、雲谷地区における太古の歴史がわずかずつではありますが明かされつつあります。

本遺跡の発掘調査はまだ継続中ではありますが、今年度の調査成果について、このたび写真等を多く掲載した概報書として刊行することにしました。研究者はもとより市民の皆様にとりましても、文化財の保護・活用、歴史学習におきまして役立つことができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査員、関係機関並びに各位からのご指導、地元各町会からのご協力、さらに工事主体者である青森県土木部のご理解に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成8年3月

青森市教育委員

池田敬

例言

目次

- | | |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 本書は、青森市教育委員会が平成7年度に実施した国道103号横内バイパス道路改良工事に係る桜峯(1)遺跡発掘調査についての概報である。 | 序 |
| 2. 桜峯(1)遺跡の遺跡番号は01207である。 | 例言 |
| 3. 本書は、概要報告書であり、調査全体の報告については調査予定区を調査完了の後、調査報告書を刊行する予定である。 | 目次 |
| 4. 本書の執筆は、調査担当者である小野貫之、木村淳一が分担しておこなった。 | はじめに..... 1 |
| 5. 調査の実施にあたって、次の方々からご指導・ご協力をいただいた。記して謝意を表する。(敬称略・順不同)
青森県教育庁文化課・青森県埋蔵文化財調査センター・青森県立郷土館・奈良教育大学・八戸工業大学・函館市教育委員会・札幌市立埋蔵文化財センター・鹿角市教育委員会・秋田県埋蔵文化財センター・地元各町会 | 調査要項..... 2
遺跡の環境..... 4
今年度の調査から..... 7
検出された遺構..... 8
出土した遺物.....13
まとめ.....16 |

はじめに

「青森・十和田ゴールドライン」とも呼ばれる国道103号線は、青森市を起点とし、八甲田・十和田湖を經由し秋田県大館市まで続く観光のメインストリートです。路線上、いくつかある交差点のうち、市内から幸畑・野木・雲谷方面へと分岐する通称横内十文字は、郊外住宅地の拡大に伴って朝夕に交通渋滞を引き起こし、通勤・通学等に支障をきたしています。

このような状況の中、青森県土木部は交通渋滞の解消、さらには青森公立大学へのアクセスの利便性向上のために、国道103号横内バイパス建設を計画し、既に一部完工・供給を開始しています。

残る建設予定地内についても、平成5年度に県土木部が県教育庁文化課に埋蔵文化財の有無の確認し、文化課が分布・試掘調査を実施したところ、予定路線内に桜峯(1)・(2)遺跡の所在の確認がなされ、双方が協議した結果、記録保存を前提とした発掘調査が必要となりました。関係機関の協議の結果、遺跡所在地の管轄である青森市教育委員会に調査が依頼され、当委員会では、文化財の保護と開発事業との円滑な調整を図るため調査依頼を受諾し、平成6年度から遺跡の発掘調査を実施することになりました。

平成6年度は、5月11日～11月8日まで桜峯(2)遺跡を中心に調査を行い、竪穴式住居跡1軒、土坑35基(うち、フラスコ状土坑12基)、配石遺構2基、埋設土器遺構1基を検出し、ダンボール約10箱の縄文時代前・中・後期の土器と石器等が出土しました。

平成7年度は、桜峯(1)遺跡の調査に移行し、5月15日～10月31日の期間で調査を実施しました。



発掘作業風景

調 査 要 項

1. 調査目的

国道 103 号道路改良工事に先立ち、予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

2. 遺跡名及び所在地

さくらみね
桜峯(1)遺跡

青森市大字雲谷字山吹 92 - 32 ほか

3. 発掘調査期間

平成 7 年 5 月 15 日 ~ 平成 7 年 10 月 31 日

4. 調査対象面積

12,000 m² (調査面積 6,100 m²)

5. 調査委託者

青森県土木部

6. 調査受託者

青森市教育委員会

7. 調査担当機関

青森市教育委員会生涯学習部社会教育課埋蔵文化財対策室

8. 調査協力機関

青森県教育庁文化課

9. 調査体制

調査指導員	村 越 潔	青森大学考古学研究所所長兼教授 (考古学)
調査員	高 島 成 侑	八戸工業大学教授 (建築史学)
"	市 川 金 丸	青森県考古学会会長 (考古学)
"	赤 沼 英 男	岩手県立博物館主任専門学芸員 (保存科学)
"	工 藤 一 彌	青森県立弘前高等学校教諭 (地質学)
"	長 崎 勝 巳	青森市立久栗坂小学校教諭 (考古学)
"	徳 差 義 男	青森市立浪打小学校教諭 (考古学)
調査協力員	今 正 秀	南部二区連合町会長

調査事務局

青森市教育委員会

教 育 長

生涯学習部長

社会教育課長

埋蔵文化財対策室長

室長補佐兼埋蔵文化財係長

主 査

指 導 主 事

主 事

”

池 田 敬

矢 野 順 平

津 川 久 善

遠 藤 正 夫

川 村 省 三

武 田 均

長 沼 圭 一(調査担当)

田 澤 淳 逸

上 野 隆 博

”

小 野 貴 之(調査担当)

”

木 村 淳 一(

”

児 玉 大 成



遺構集中地区

遺跡の環境

青森市は、青森県のほぼ中央にあり、面積が 693.47 km²、周囲が 162.85km で、北を陸奥湾、南を八甲田連峰に面した街です。

地形から見た青森市は、大きく 4 つの地域に分かれます。中心部には市南方にそびえる八甲田連峰を源とする荒川、駒込川等の大小多くの河川から成り立った青森平野が東西約 10km、南北約 5km にわたって広がり、西部では、「入内断層」と呼ばれる大きな断層によって、標高 50m ~ 150m の緩やかな丘陵地と平野とに区切られています。

また、東部方面は、第三紀よりも古い地層から成り立っている東岳 (684m) を中心として、比較的侵食の進んだ台地が南部方面に広がっています。

南部は、八甲田カルデラが噴火によって噴出した火砕流の堆積物によって形成された緩やかな火山性台地が広がっています。この台地の裾野付近は、横内川・合子沢川などの河川による多くの谷によって分けられています。

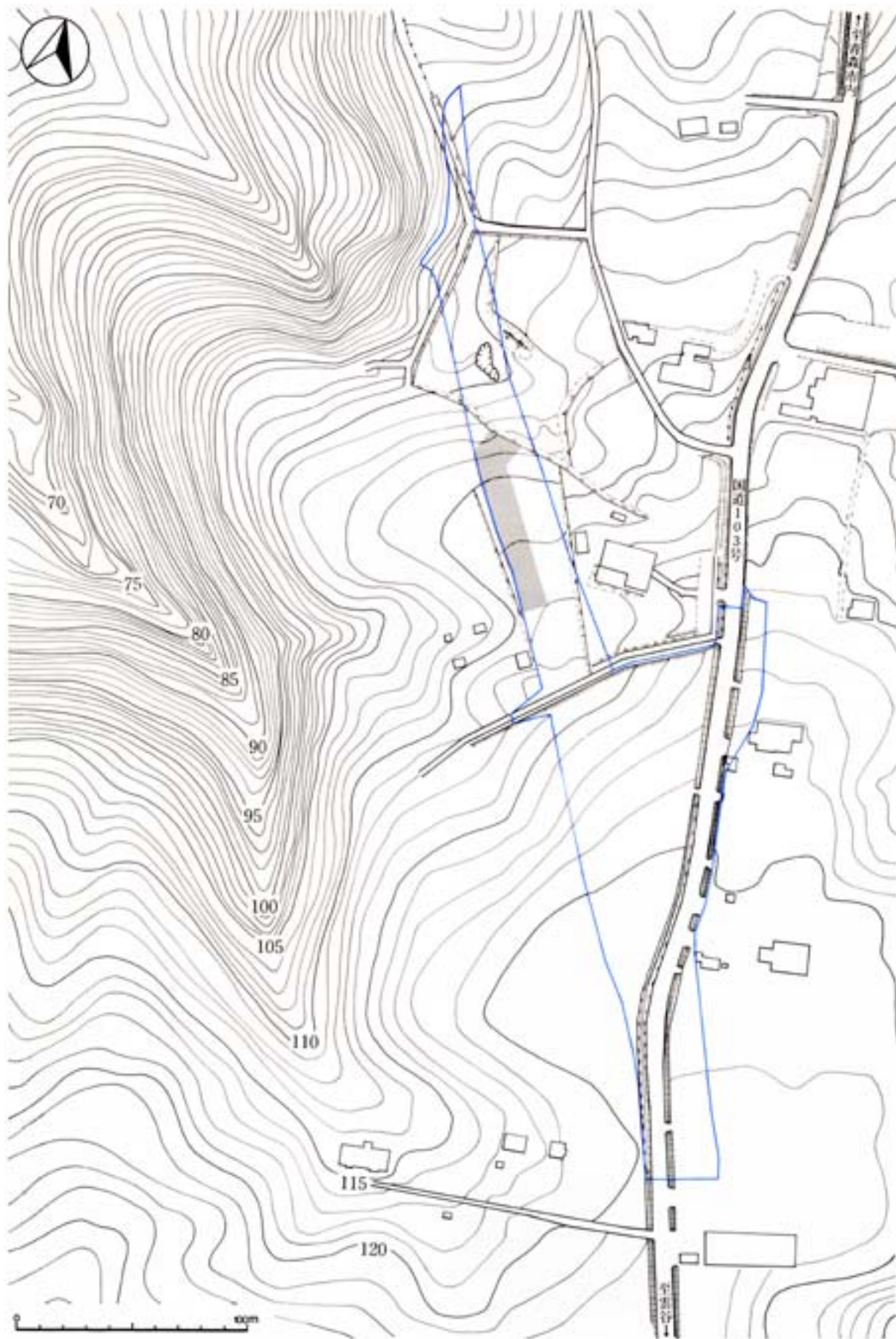
桜峯(1)遺跡は、この南部の火山性台地の標高 100m ~ 120m 付近に立地しています。市街地からは、国道 103 号線を雲谷方面に向かい青森公立大学の約 1km 手前の部分が遺跡にあたります。

遺跡が国道 103 号線と交わる標高 115m ~ 120m 付近の地形は、緩やかに北西方向に傾斜していますが、標高 110m 付近では西方向にむかって沢が広がっており、北側の小高い面はやや平坦に近い状況です。それ以北では緩やかに北方向に傾斜し、標高 100m 付近で北西方向に沢があり、比較的急傾斜な地形となっています。

遺跡調査区の発掘調査前の土地利用状況は、大半が近代に植林された林であり、一部果樹園として利用されていたものが使われなくなって、コンクリート等の廃材を使って土を盛って原野となった土地でした。



発掘調査開始前風景 (遺構集中地区)



桜峯（1）遺跡調査予定地区（網かけ部分が遺構集中地区）

周辺の遺跡

桜峯(1)遺跡の東側には、当遺跡とほぼ同時期の鏡山遺跡があり、また約1km北側には、昨年度調査が行われた桜峯(2)遺跡があります。桜峯(1)遺跡とは比高差が約60mです。

桜峯(2)遺跡からは竪穴式住居跡1軒、フラスコ状土坑12基、埋設土器遺構1基等が検出されています。12基検出されたフラスコ状土坑のうち、2基の底面には赤色顔料が納められていて、お墓の可能性が非常に高い例として注目されます。

尾根を西方向に一つ隔てた横内遺跡からは、縄文時代前期の竪穴式住居跡3軒が検出されており、うち1軒はテラスを持つ円形のものです。

隣接の横内(2)遺跡では、縄文時代の土坑26基が検出されています。また、西側の合子沢川を挟んだ隣の台地上には新町野遺跡、野木遺跡があります。東側の横内川を挟んだ隣の台地上には縄文時代後期の四ツ石遺跡、中・後期の四ツ石(2)遺跡、四ツ石(3)遺跡、縄文時代晩期の田茂木野遺跡などがあります。

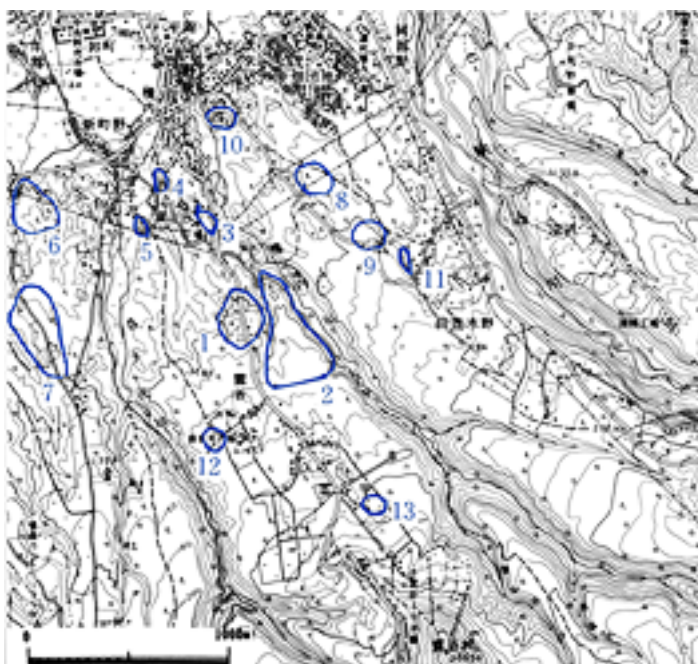
桜峯(1)遺跡より標高の高い遺跡は、同じ台地上で雲谷山崎遺跡・縄文時代後期の雲谷山吹(1)遺跡などが確認されています。



桜峯(2)遺跡 フラスコ状土坑内検出赤色顔料



横内遺跡 テラスを持つ竪穴式住居

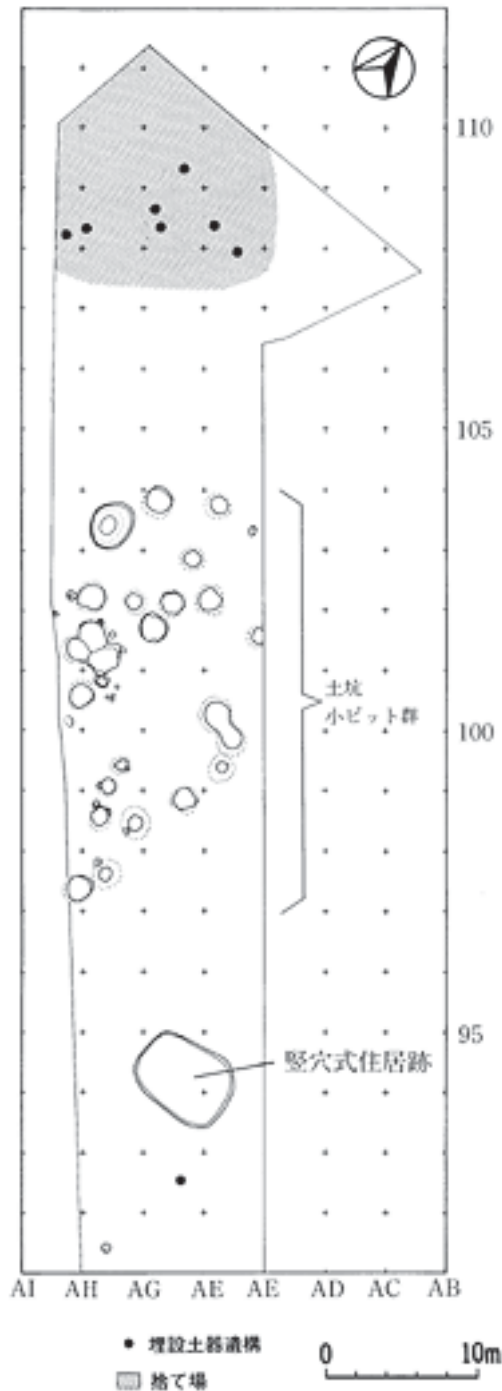


周辺の遺跡

番号	遺跡名	時代
1	桜峯(1)	縄文(前・中・後・晩)
2	鏡山	縄文(前・中・後)
3	桜峯(2)	縄文(前・中・後)
4	横内	縄文(前・中)
5	横内(2)	縄文(前・中)、平安
6	新町野	縄文(早・前・中・後)、平安
7	野木	縄文、平安
8	四ツ石	縄文(後)
9	四ツ石(2)	縄文(中・後)
10	四ツ石(3)	縄文
11	田茂木野	縄文(晩)
12	雲谷山崎	縄文
13	雲谷山吹(1)	縄文(晩)

今年度の調査から

今年度の調査では、竪穴式住居跡1軒、土坑30基、埋設土器遺構8基、小ピット45基の遺構を検出しました。遺構の大部分は、面積900㎡ほどの調査区の一部、小さな台地となっている場所で検出しています。遺構配置図を見ると、遺構は、土坑や埋設土器遺構など種類ごとにまとまって配置されていることがわかります。



遺構配置図 (遺構集中地区)

調査区の北側は、ゆるやかな斜面になっており、斜面からは多くの土器が出土しました。その量は、調査で出土した土器の大部分を占めます。この斜面出土の土器や、遺構の中から出土した土器の文様の特征から、これらの遺構は今からおよそ5,000年前、縄文時代前期の末から中期の初めごろに位置づけられるものと思われます。検出した土坑に重複が見られること、埋設土器遺構に時期差が認められることなどを考えると、検出した遺構の全てが同じ時期に存在したものではないようです。

遺構集中地区からは他に小ピットも検出されていますが、その性格等については現時点においては、はっきりしていません。

遺構集中地区以外の調査区域では、およそ5,000㎡ほど調査を行い、小ピット25基、土坑3基を検出しました。



遺構集中地区作業風景

検出された遺構

竪穴式住居跡

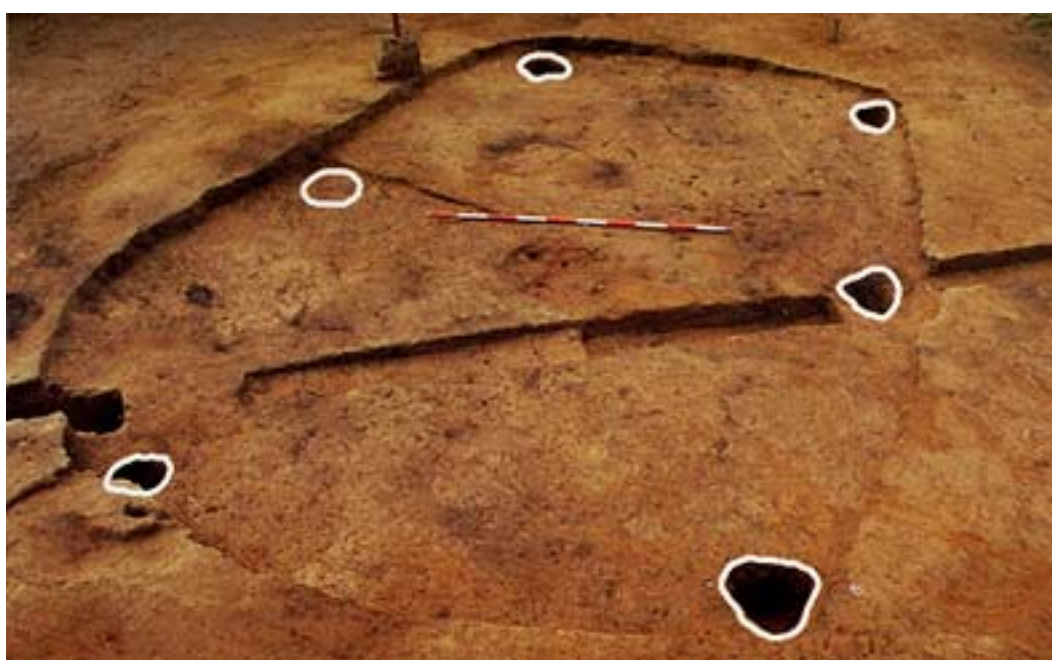
今年度の調査では、竪穴式住居跡は標高110m付近の遺構集中地区の南端部分で1軒検出されています。調査区の西側にある沢に向かって傾斜を始める直前の平坦に近い面を利用して竪穴式住居が建てられていました。

竪穴式住居跡の平面形は隅丸長方形の形をとり、長軸6.5m、短軸4.5m、面積は26.5㎡の大きさで、東西方向を軸にして建てられていました。柱を建てるために掘られた柱穴の跡は住居の壁際に近い場所からそれぞれ6本分が検出され、大きさは口径40cm前後、深さが住居の床面から50cm程度のものです。また、住居の中で、火を焚くために作られた炉は、地面を掘っただけの地床炉と呼ばれるもので大きさは長軸80cm、短軸75cm、深さは12cmで、住居のほぼ中心にありました。火が焚かれた部分では、熱をうけ地面の土が赤く変色を受けています。住居の壁際に溝は確認されていません。

竪穴式住居跡に埋まっていた土の中から出土した土器の時期から、縄文時代中期初頭のものと思われる。遺構集中地区から見つかったフラスコ状土坑をつくった人々が住んでいた住居の一つであったことが考えられます。しかし、この竪穴式住居跡の柱穴の配置などは、他の遺跡で見ついている同じ時期の竪穴式住居跡で見られるものとは多少異なっています。

一般的にこの時期の遺跡から見つかる竪穴式住居跡の形態は、円形・楕円形等を取り、中央寄りに2本もしくは4本の柱穴を掘っています。壁際には、溝があるものも見られていますし、小柱穴を巡らすものもあります。本遺跡から検出された竪穴式住居跡は、この例には当てはまらないものです。

また、竪穴式住居跡の南側では西側に向かって沢が広がっていきますが、調査区域内では、10数年前にその沢が削られ、コンクリート等の廃材を埋めて、竪穴式住居跡の見つかった面と同じくらいの高さまで平坦に埋められていました。このことから竪穴式住居跡の上部が壊されていた可能性もあります。



竪穴式住居跡

土 坑

今年度の調査で検出した30基の土坑は、3基を除いて、調査区の一部でまとめて検出されました。

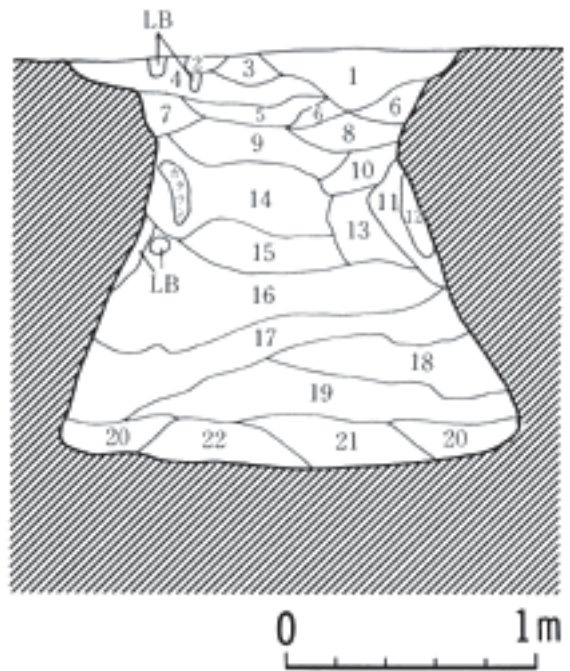
まとめて検出した27基の土坑のうち21基は口径に対して底部が広がる形をしています。理科の実験で使うフラスコに断面の形が似ていることからフラスコ状土坑と呼ばれるものです。

フラスコ状土坑の規模は平均で、口径131cm、底径173cm、深さ109cmです。平均的な規模に比べてかなり浅い土坑がいくつかありました。

土坑の中には底の部分に小さな穴を持つものが6基ありました。穴を持つ土坑の形状はフラスコ状が5基、その他が1基です。小さな穴の大きさは平均で、口径31cm、底径25cm、深さ12cmです。小さな穴は土坑底部の中央や端の方にそれぞれ半分くらいの割合で位置しています。また、底部の穴を2個持つものもあります。

土坑の中からは、土器や石器、石、木炭、炭化したクルミなどが出土しています。土坑の中から出土した土器は、大半が破片ですが完形に近いものも2点ありました。縄文時代前期末から中期初頭の時期に位置づけられます。土坑の中に入っている土の様子を見ると、焼土や炭化物がまとめて入っているもの、ロームが入っているものがあります。特にロームは、土坑の口の部分や内部を塞いだ状態になっているものもあります。このような土坑の中の土の堆積状況から、これらの土坑は人の手によって埋められているものが多いと思われます。

これら土坑の用途については食料を保存する貯蔵穴や、遺体を埋葬する墓穴としての役割が主に考えられ、他の遺跡では土坑の中から人骨を検出した例や、土坑内部に植物の実が厚く堆積していた例があります。しかし、そのように用途がはっきり判断できる例は、一部のようにです。



フラスコ状土坑断面図



土坑底面部の小さい穴

本遺跡ではこのような土坑の用途について明確に判断できる材料はありませんが、土坑が竪穴式住居跡を検出した場所に隣接して集中していることや、土坑の大部分を占めるフラスコ状土坑の形態が食物の貯蔵に適した形態と思われること、及び、土坑内の堆積状況からみて、一定の期間、口が開いていたと考えられることなどから、これらの土坑は貯蔵用として作られたのではないかと考えています。

ただし、一部の土坑には堆積状況や土器等の遺物の出土状況などを考え合わせた場合、墓穴への転用が考えられるものがあり、それらについて今後検討していきたいと考えています。

フラスコ状土坑の集中地区より南側の、国道103号線付近のあまり遺構の検出されない調査区からは、竪穴式住居跡やフラスコ状土坑よりも新しい時期の遺構が検出されています。

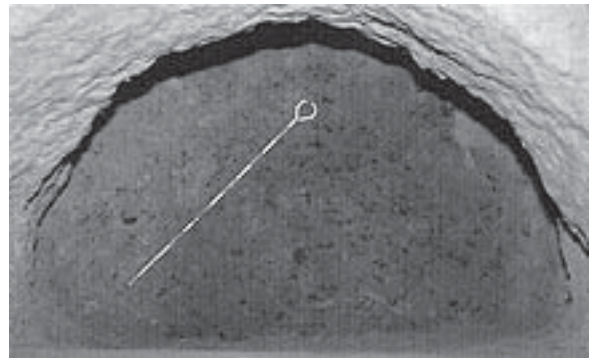
一つは、平面形が小判形のもので、規模は、口径が155cm×105cmで、深さが35cmのものです。土坑の底面から、縄文時代後期のものと思われる土製の垂飾品が3点出土しています。これは、お墓としての要素が高いと思われるものです。

その土坑からさらに南へ20m離れた所からは、円形の土坑が1基検出されました。口径190cm、底径120cm、深さ70cmあり、土坑に埋まっていた土の中からは、縄文時代晩期の壺の破片と炭化したクリが出てきました。

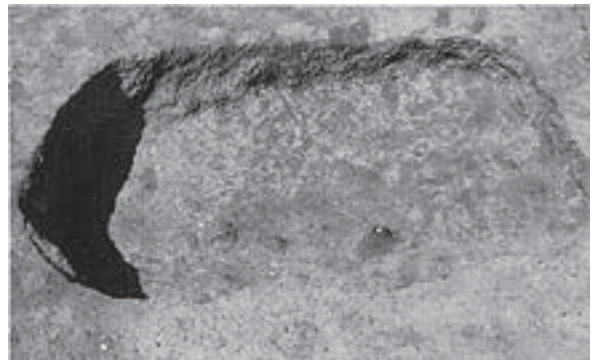
この調査区域には、この2つの土坑以外に縄文時代後・晩期の遺構は見つかっていないことから調査区域外にその時期の他の遺構の存在の可能性があると考えられます。



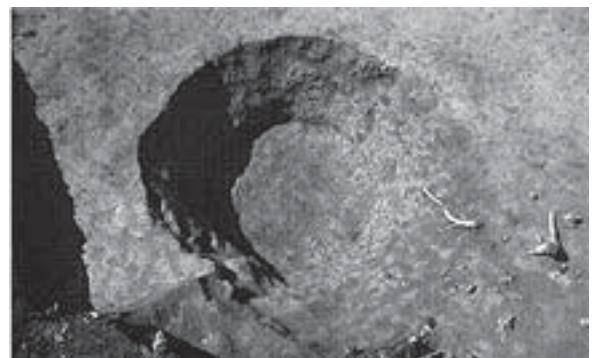
土坑底面浅鉢出土状況



土坑内炭化物出土状況



土坑（小判形）



土坑（円形）

埋設土器遺構

地面を掘りくぼめて穴の中に土器を意図的に埋めてある埋設土器遺構が、8基検出されています。このうち7基が調査区北端の緩やかな斜面、土器等の捨て場と思われる部分に集まっています。この遺構を作る場所は決まっていたようです。個々の土器の形態、文様には違いが認められ、それぞれの土器の埋められた時期には差があるようです。縄文時代前期末から中期初頭の時期に位置づけられるものです。

埋められている土器は口が上を向いています。が、やや傾いているものもあります。また、底より少し上の胴部に穴があけられているものがありました。さらに、3基の土器の内部には石が1個入っていました。土器にあけられる穴や土器内部の石などは、他の遺跡の検出例にも見られる特徴です。

この遺構がどんな役割を持ったものであるのかについては、子供の埋葬施設、お墓と考えられるようです。他の遺跡では、埋められている土器の中から骨（胎児骨、骨粉）が出土したとの報告例が、いくつかあり、本遺跡で検出された埋設土器遺構についても子供のお墓だろうと考えています。ただし、本遺跡で検出された埋設土器遺構の中からは、骨、骨粉などは出土していません。



埋設土器遺構確認の様子



埋められている土器の様子



土器にあけられた穴



土器内部の石

捨て場

遺構集中地区の北端は、緩やかに下がっていく斜面になっており、斜面の南北 15m、東西 15m、面積約 180 m²の範囲にわたって、土器片が散乱して出土しました。今年度の調査で出土した土器の約 8 割に相当し、量はダンボールで 25 箱分ほどです。土器の捨て場と思われます。加えて出土石器のうちの大半もここで出土しました。主に磨石、敲石など礫石器が多いです。斜面全体を土器片が覆っていた訳ではなく、同じ個体と思われる破片がブロック状に、いくつかにまとまり散在している状況でした。

捨て場から出土した土器の時期は、検出した遺構同様、縄文時代前期末から中期初頭の時期に位置づけられるもので、時期差を持ち、この斜面が世代をこえて捨て場として使われていたことを示しています。

斜面の途中である調査区の境界にも土器は出土しており、調査区付近の畑などでも多量の土器片が見られることから、捨て場の周辺部分への広がりが予想されます。斜面などの自然地形を利用した土器の捨て場は、規模や時期など違いはありますが、青森市の遺跡では、東北縦貫自動車道青森インター近くの熊沢遺跡や三内丸山(2)遺跡などでも見られています。



土器出土状況



捨て場の様子

出土した遺物

土 器

今年度の調査ではダンボールで約30箱の土器が出土しました。

土器の出土の状況には、大まかにとらえて二通りあります。一つは遺構集中地区、調査区北端の捨て場での出土の状況です。同じ個体と思われる土器の破片がブロック状にまとまって出土しています。出土した土器の時期は縄文時代前期末から中期初頭に位置づけられるもので、土器の基本的な形は細長いバケツのような形をしています。時期が進むにつれ、口の部分に突起がついたり、土器の上部が開いたりしてきます。その他の形状のものとしては、縄文時代中期初頭の浅鉢が1点出土しています。

もう一つは、その他の調査区で見られた状況で、出土した土器は小さな破片の状態ではばらばらに出土しています。近くに同じ土器の破片があるものはほとんど見られません。様々な時期のものがあるようで、遺構集中地区で出土した、縄文時代前期末から中期初頭の時期の土器の他に、縄文時代後期の土器片、晩期の壺形の土器や平安時代の土師器や須恵器が出土しています。



縄文時代前期末～中期初頭の土器



復元した土器



その他の時期の土器

石 器

本遺跡から出土した石器は、石鏃・石槍・石筥・石匙・磨製石斧などです。

狩猟に使われたと考えられる石器のうち、石鏃は、柄のついた有茎鏃、柄のない無茎鏃、細長い形態を持つ尖基鏃が出土しています。また、石槍は、土坑の中から出土した1点のみです。

石錐は、穴をあけるために使われた加工工具の一つで、先端部は使用されたため摩滅しています。石筥は、東北北部から北海道南部にわたって特にみられる石器で、木や骨を切ったり、削ったり、または皮をなめしたりするための道具として考えられているものです。

石匙は、皮はぎや切るための道具として考えられているものです。縦型と横型のものがあり、この時期の東日本では、縦型のものが一般的です。

磨製石斧は、木を切ったりするための石で作った斧で、表面を研磨し先端部に刃をつけています。

凹石、磨石、敲石は、木の実の製粉等の加工だけではなく、さまざまな道具を作る際にも、その加工工具として使われたと考えられるもので、河原石などの自然礫を利用しています。一つの石で、磨ったり、たたいたりしているものも見られます。

石皿は、製粉の際の受け皿としての役割を果たすものとして考えられています。本遺跡から出土した石皿にも使用された跡が見られ、両面使っているものもありました。

また、円筒土器に伴う石器と考えられている半円状扁平打製石器が土坑内や捨て場の中から出土しています。

祭祀など精神生活に関連したと考えられている石棒、石刀、石剣などは、今年度の調査からは出土しませんでした。

全体として出土量は多くありませんが、生活を営むにあたっての最低限の生活道具にあたる石器類は見つかっています。



石鏃・石槍



磨製石斧・石筥・石錐・石匙



凹石・磨石・敲石・石皿



半円状扁平打製石器

土製品

本遺跡から出土した土製品は、ミニチュア土器、円盤状土製品、垂飾品、紐状粘土塊です。

ミニチュア土器は、4点出土しており、フラスコ状土坑などが集中している地区から出土しています。1点は、ほぼ全体の形が伺えるものですが、残りの3点は、底の部分のみが残っているだけのものです。

円盤状土製品は、土器片を打ち欠き、周りを円形に磨いて形を整えた製品です。

本遺跡から出土したものは、両面から穴をあけようとした跡があります。

垂飾品は、遺構集中地区とは異なる南側の地区の小判形の土坑の中に3点セットで納められていたもので、そのうちの1点には文様が施され、側面から穴が通されています。残りの2点は、小型で装飾が施されていない、穴が通されたものです。

紐状粘土塊は、竪穴式住居跡の上層から出土したもので、粘土紐の一部が焼かれできたものと考えられます。

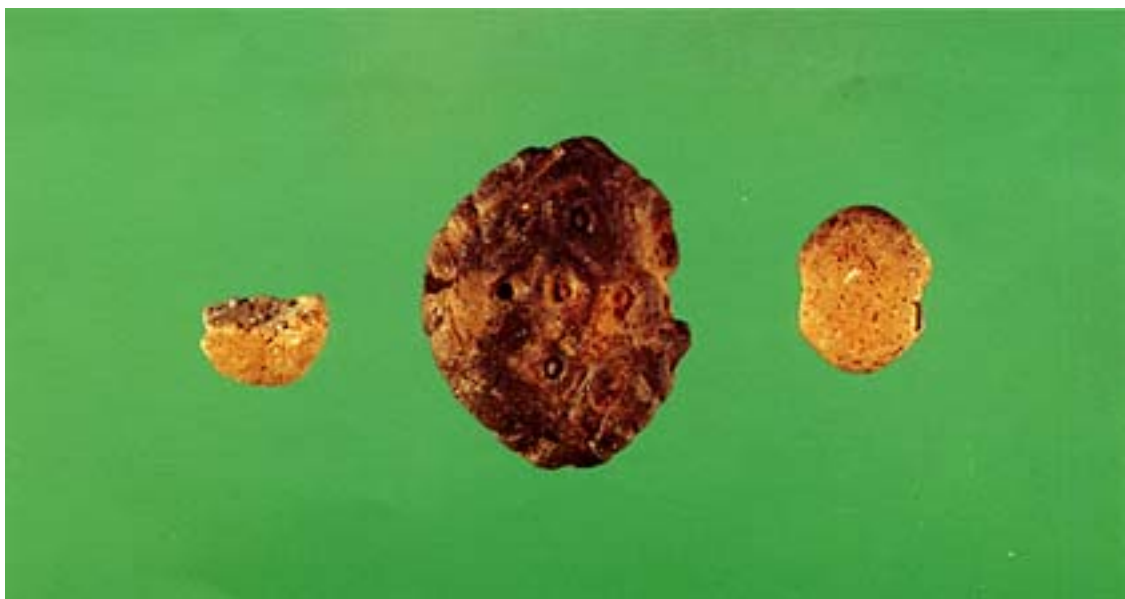
土偶などの土製品は今年度の調査では出土しませんでした。



ミニチュア土器



円盤状土製品・紐状粘土塊



垂飾品

ま と め

桜峯(1)遺跡は、縄文時代前期末から中期初頭が主体の遺跡で、平成7年度の発掘調査では、竪穴式住居跡1軒、フラスコ状土坑21基を含む土坑30基、埋設土器遺構8基、小ピット45基等の遺構が検出されました。そのうち土坑3基と小ピット25基を除いた遺構の大部分が調査区のおよそ900㎡ほどの小さな台地で見つかっています。

その小さな台地の北側の緩やかな斜面からは今年度の調査で出土した土器や石器の大半が見つかっています。これは、規模は違いますが、三内丸山(2)遺跡の北の谷や熊沢遺跡の捨て場など、自然地形の傾斜面を利用して土器などの遺物を捨てている状況がこの標高100メートル以上の桜峯(1)遺跡においても確認されました。

集落を営むにあたって、各施設(住居、貯蔵穴、お墓など)の配置は、決して散らばったものではなく、ある秩序なりが存在して、それによって配置をおこなう状況が、この遺跡の遺構配置からも垣間見ることができそうです。その意味では、集落の住居やお墓などの他の施設が今年度の調査区域外に伸びていく可能性は非常に高いものと思われれます。

また、土坑が切りあうという検出状況から、すべての土坑が同時に存在していたのではなく、ある程度の時期幅を持っていたことを読みとることができます。このことは、遺跡全体から出土する土器型式がいくつかにまたがることから裏付けられています。

遺構の集中していない南側の調査区では、遺物・遺構とも発見量が少なく、集落が存在したとしてもその縁辺部的な位置づけだったと考えられます。遺構集中地区ではよく見られたフラスコ状土坑や埋設土器遺構のような施設はなく、それらとは異なる時期の土坑が2基が見つかっています。そのうちの一つは、出土遺物などからお墓の可能性が強いものです。

なお、発掘調査は来年度以降も継続する予定です。



現地説明会

報告書抄録

ふりがな	さくらみね かつこいち いせきはつつちょうさがいほう							
書名	桜峯(1)遺跡発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第27集							
編著者名	小野貴之・木村淳一							
編集機関	青森市教育委員会							
所在地	〒030 青森県青森市中央一丁目22-5 TEL0177-34-1111							
発行年月日	西暦 1996年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さくらみね かつこいち 桜峯(1)	あおもりあおもりし 青森県青森市 もやあざまふき 雲谷字山吹	02201	01207	40° 45 20	140° 46 37"	19950515 ~ 19951031	6,100	国道103号横内 バイパス道路 改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
桜峯(1)	集落	縄文時代	竪穴式住居跡 土坑 埋設土器遺構 溝状遺構	1軒 30基 8基 1条	縄文土器 石器			

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962 『三内霊園遺跡調査概報』	青森市埋蔵文化財調査報告書第16集	1991 『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』
"	2	1965 『四ツ石遺跡調査概報』	"	第17集 1992 『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』
"	3	1967 『玉清水遺跡調査概報』	"	第18集 1993 『三内丸山(2)遺跡発掘調査概報』
"	4	1970 『三内丸山遺跡調査概報』	"	第19集 1993 『市内遺跡発掘調査報告書』
"	5	1971 『野木和遺跡調査報告書』	"	第20集 1994 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
"	6	1971 『玉清水 遺跡発掘調査報告書』	"	第21集 1994 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
"	7	1971 『大浦遺跡調査報告書』	"	第22集 1994 『小三内遺跡発掘調査報告書』
"	8	1973 『孫内遺跡発掘調査報告書』	"	第23集 1994 『三内丸山(2)遺跡・小三内遺跡発掘調査報告書』
		1979 『螢沢遺跡』	"	第24集 1995 『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』
		1983 『四戸橋遺跡調査報告書』	"	第25集 1995 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
青森市の埋蔵文化財		1983 『山野峠遺跡』	"	第26集 1995 『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』
"		1985 『長森遺跡発掘調査報告書』	"	第27集 1996 『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』
"		1986 『田茂木野遺跡発掘調査報告書』	"	第28集 1996 『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』
"		1986 『横内城遺跡発掘調査報告書』	"	第29集 1996 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
"		1988 『三内丸山 遺跡発掘調査報告書』	"	第30集 1996 『小牧野遺跡発掘調査報告書』

青森市埋蔵文化財調査報告書第 27 集

桜峯(1)遺跡発掘調査概報

発行年月日 平成 8 年 3 月 19 日

発行 青森市教育委員会

〒030 青森市中央一丁目 22 - 5

TEL 0177 - 34 - 1111

印刷 東北印刷工業株式会社

〒030 青森市本町二丁目 11 - 16

TEL 0177 - 75 - 1431